倉本一平

長谷川周三
の
歴史レポート

本能寺の変　その2

今回から倉本一平の歴史レポートは、
長谷川周三との共同執筆といたします。

長谷川　周三
倉本一平

天海僧正

光秀像　亀岡市
ききょうの里

■　光秀は死んでいなかった

NHK 大河ドラマ「麒麟が来る」の最終回、山崎の合戦の後も明智光秀は生きていましたね。
ドラマでは、本能寺の変の 3 年後、笑顔がとってもチャーミングな駒役の門脇麦さんが、将軍足利義昭に「十兵衛（光秀）さまが丹波の山奥に潜み、いつかまた立ち上がる日に備えておいでだという噂をご存知ですか」と尋ねると、義昭は「まことか」と怪訝な顔で微笑み返えす。
シーンは変わり駒さんが、城下の市（いち）で光秀らしき姿を見て後を追う。
ラストシーンは、光秀が夕日に向かってどこまでも馬を走らせていく・・・完。
まさに歴史ロマンを彷彿させる幕切れでしたね。
ではこのドラマの続編を、筆者独自の歴史ロマンで綴ってみましょう。
丹波山中の寺で僧侶として潜んでいた光秀は秀吉の死後、家康の派遣した服部党忍者の助けを借りて江戸城に向かう。
家康と 16 年ぶりに再会して、改めて麒麟が来る安寧な国作りを誓う。
関ケ原の戦いでは家康の参謀役として、美濃国稲葉家一族の稲葉正成（お福の元夫）が家老を務める小早川秀秋への裏切り工作を画策し、東軍を勝利に導く。
その後、川越「喜多院」の僧正に就き、名を天海とする。家康には諸大名が争いや反乱を起こさせないよう大名の行動規律を定めた武家御法度を制定させる。

喜多院を訪ずれた家康に、光秀の家老だった斎藤利三の子、お福（後の春日局）を引き会わせ、家康の子を産ませる。
その子の名を家康の幼少時の名と同じ竹千代とし、元服後は家康の「家」と光秀の「光」の一字ずつを取って、家光と命名する。
家康が逝去した後、将軍になった家光、天海、春日局は徳川幕府における絶大なる権力を持ち、参勤交代や老中、奉行、大目付などの職務制度を設けるなど、幕府機構改革を推し進めていく。
こうして時代は武力で大名を統制す武断政治から、争いのない学問や教育で統制する文治政治に変化していき、その後明治維新までの長きに亘り、平和な徳川幕府はつづく。
ここでようやく麒麟がやって来ます。しかし光秀=天海はこの時 100 歳を超えていましたし、麒麟が来る夢を光秀に託した駒さんは、生きていたでしょうか。
生きていてくれたと信じたいですね。
なお、光秀が天海僧正だとする説の最も有力な根拠は、両者の筆跡が酷似していることです。
本編筆者の一人、倉本一平氏の書道の先生に、日本を代表する書道家「故西田王堂氏」がいましたが、この西田氏や警察の科捜研（科学捜査研究所）のメンバーが両者の筆跡を見て「酷似している」と唸ったそうです。

■　光秀は何故信長を討ったのか

さて、ここからは光秀が何故信長を殺害したのか、その動機を探ります。
ドラマでは信長が光秀に、毛利領の鞆にいる義昭を殺せと命じたことが謀反の引き金になっていましたが、殺害動機については、これまで様々な逸話が語られてきました。
代表的なものとしては「諏訪で折檻された恨み（注 1）」、「実母見殺しの恨み（注 2）」、「国替えによる恨み（注 3）」、「家康の供饗応役解任の恨み（注4）」などが挙げられますが、一方では信長の長宗我部討伐を阻止するための謀反だったという説もあります。

近衛前久

織田信長

長宗我部元親

そもそも長宗我部元親と信長は光秀のとりなしで友好関係にあり、「元親記」によると、元親は信長から「四国は切り取り次第（＝自力で土地を奪い取る）、所領として良い」という内容の朱印状まで貰っていました。しかし本能寺の変直前に、信長の三男信孝に長宗我部征伐を命じていたため、光秀はそれを阻止するために謀反を起こしたと言われています。

これは、多くの歴史学者が支持する殺害動機のようですが、いかがなものでしょう。
また、秀吉や家康、公家の近衛前久らの黒幕説などもがあります。
現在では光秀謀反に繋がる決定的な証拠が見つかっていませんので、真相は明らかになっていませんが、光秀が信長憎しということだけで謀反に及んだとは到底考えられません。
戦国時代の武将達は勝ち目のない戦を、自らが仕掛けることは無かったと言われています。
負ければ家臣及びその一族郎党全てが、悲惨な目に遭うからです。
光秀謀反の背景には、信長を殺害した後に天下を取るという周到な計画があったと思います。
そのためには、光秀と共に信長亡き後の信長家臣団（柴田勝家、滝川一益、信長の子信忠・信孝・信雄など）に立ち向かい制圧できる実力者と、征夷大将軍という官位を授けてくれる天皇との太いパイプを持つ有力な公家の存在が必要不可欠だったと思います。
そう考えていくと、黒幕は秀吉と公家の近衛前久ではないかと思いますが如何でしょうか。
では、この三人が何故信長を殺さねばならなかったか、次回はその真相に迫ります。
巨大な軍事力と財力を背景にして圧倒的な権力を誇る信長に、殺意を抱いて立ち向かうためには、並外れた勇気と、絶対的な後ろ盾が必要だったと思います。

注 1:　武田征伐後、諏訪大社近くの法華寺の戦勝祝いで「我らが苦労した甲斐があった」と祝賀を述べた光秀に「おのれは何の功があったか」と信長が激怒し、光秀を欄干に打ち付けたこと。
柱 2:　光秀が丹波八上城主波多野秀治らを生け捕りにして安土に移送したが、信長の命令で皆、磔にされた。激怒した八上城の家臣たちは人質にしていた光秀の母親を磔にしたということ。
注 3:　光秀が秀吉の援軍として中国地方に出陣する前に信長から「まだ敵の所領である出雲、石見の二カ国を将来与えるが、その代わりに丹波と坂本城のある近江の志賀郡を召上げる」と言い渡されたこと。
注 4:　光秀が家康の饗応役を信長から命じられたが、その手際の悪さから突然解任され、饗応役を堀秀政に替えられたこと。

2021 年 3 月

長谷川周三　1970 年 3 月　瑞浪高校卒業
倉本　一平　1970 年 3 月　瑞浪高校卒業